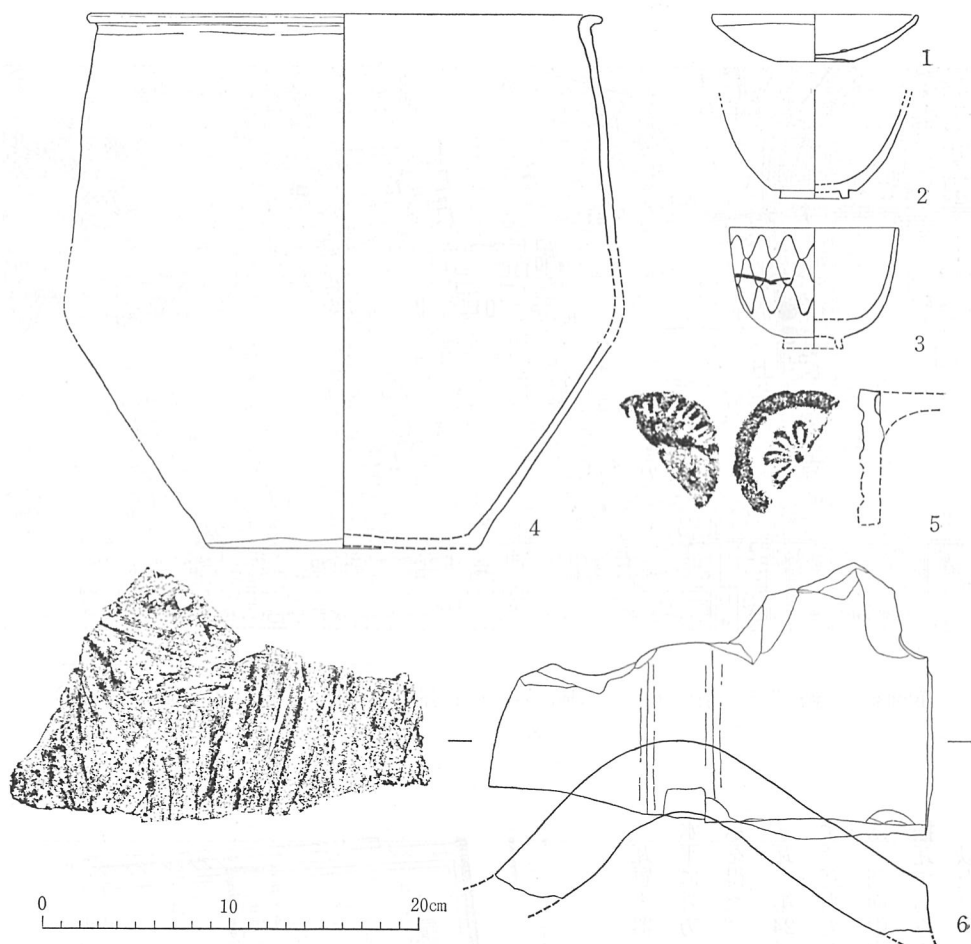




第24図 久邇宮墓地の出土品 (1/4)

般舟院陵電灯電話線埋設工事箇所調査

般舟院陵(第25図)の電灯電話設備に際し、参道入口から見張所までの地下ケーブル布設及び、電気引込み柱建設などの工事を目的として、昭和五十八年十月十二・十三日の両日にわたって立会調査を実施した。

今回の掘削区域は、大正十年に移管され、緩やかな傾斜地に客土整地を施したところで、掘削は電気引込み柱坑から順次開始され、幅約四〇センチ、深さ六五センチ、総延長約四六メートルにわたって手掘りで行なった(第26図)。

掘削溝内の土層状況は次のとおりである。

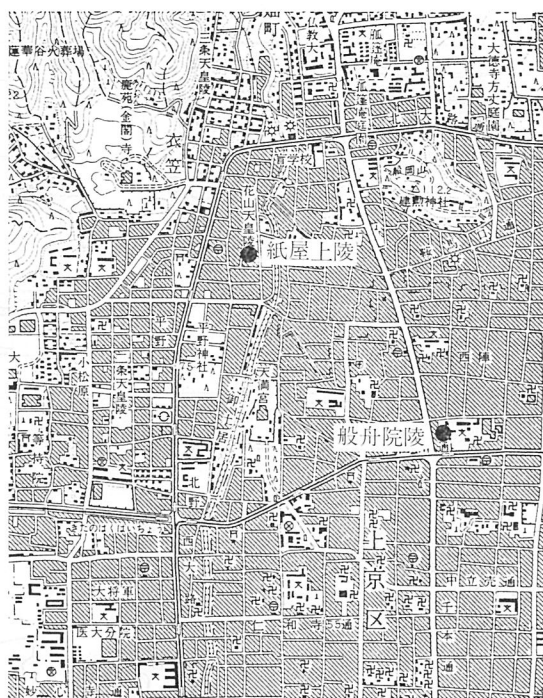
I層 表土。砂利を含む黒色土。

II層 盛土。新旧両時代の遺物を含む。

III層 水分を含む暗褐色粘質土。

IV層 混礫黄褐色土。礫は径三センチ〜一五センチのものが大部分で、二十五センチ前後のものも一部に含まれていた。

調査の結果、遺構は検出されず、盛土層内五〇センチ前後の深さから、5箇所(第26図1〜5)で遺物が

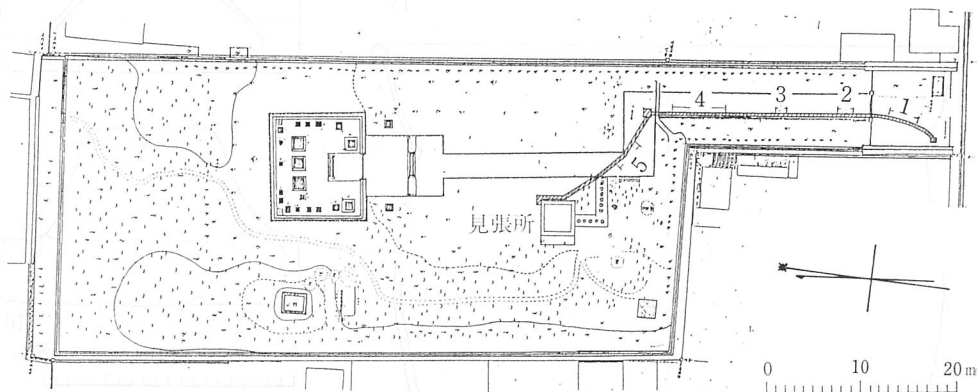


第25図 般舟院陵および紙屋上陵の位置(1/30000)

出土した。

出土遺物は、土師器九三点・瓦質土器三点・陶器三四七点・磁器四八
点・瓦三点・骨片一点（一括して数える）・五輪塔の火輪部一点の総計
四九六点である。时期的には桃山時代に遡るものを含むが、大半が明治
以降である。主なものを次に述べる。

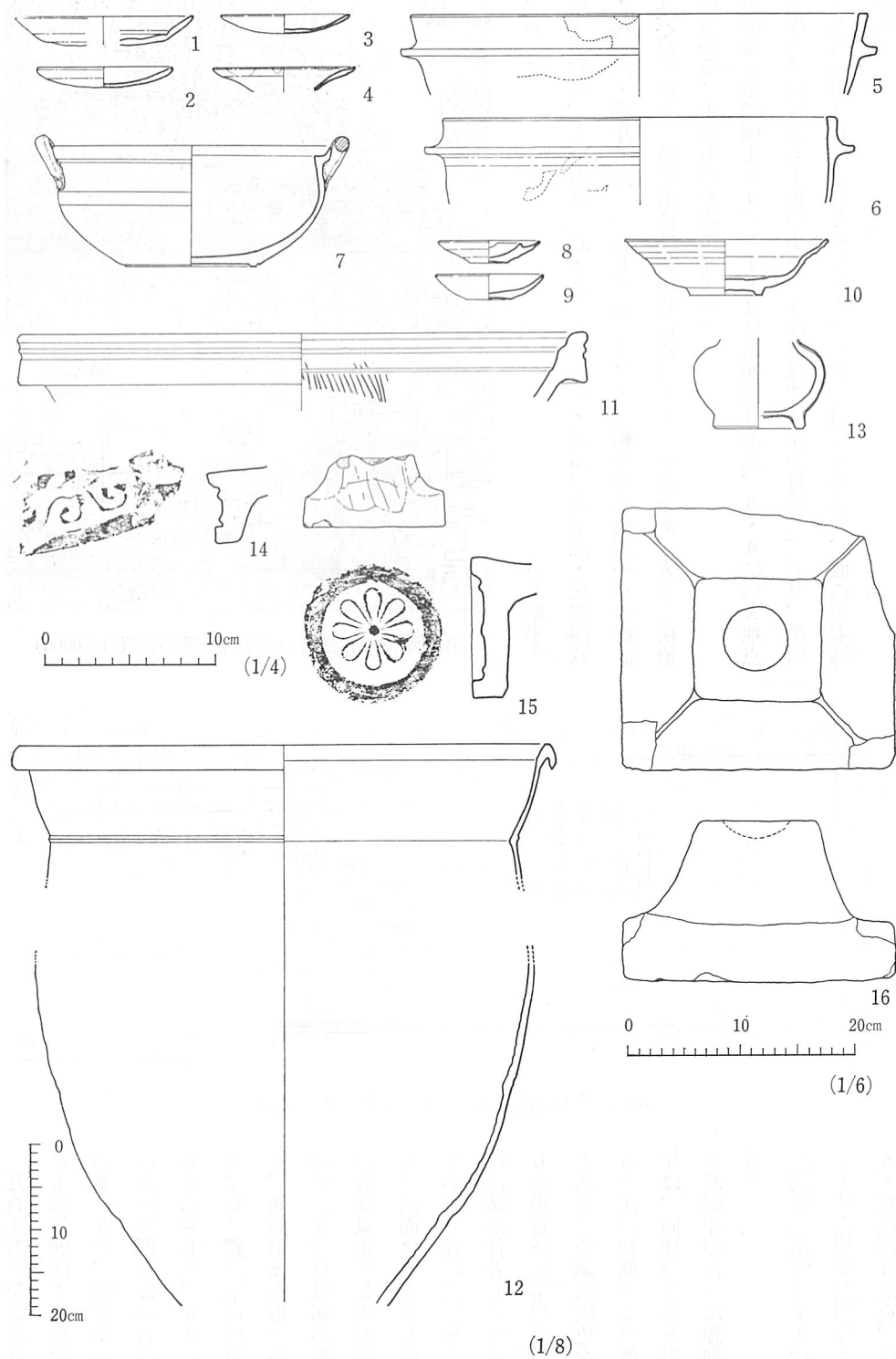
土師器（第27図1～4） 1・2は第26図3地点、3・4は同2地点
から出土。いずれも手捏の小皿。4は口縁部に煤が付着しており、燈明
皿として使用されていたとみられる。大半が同様の小皿で、他に植木鉢
がある。



第26図 般舟院陵調査箇所（斜線部分）（1/800）

瓦質土器（第27図5・6）
ともに第26図1地点出土の
羽釜。5は、胴部から口縁
にかけて開きながら立ち上
るのに対して、6はほぼ直
立する。罫は突出度が高
く、断面形は台形。外面の
調整は5の口縁部が横撫で
の他は風化のため不明であ
る。内面は二点ともに横撫
でが施されている。外面
には煤が付着しているが、
6の場合は墨書の可能性
もある。色調は灰色を呈す
る。江戸初期。この他の一
片は、同様のものと思われ
るが細片のために詳細は不
明。

陶器（第27図7～12）
7・9・10は第26図2地点、
8・12は同3地点、11は同



第27図 般舟院陵の出土品（4・5・6の点線部分は煤付着部分）

4地点の出土。7は明治以降の行平鍋。8・9は京焼の燈明皿で、内面のみに釉が施され、釉面には貫入が入る。10は小皿で、須恵質の素地に釉が施されている。成形は轆轤で行われているが、調整はやや粗雑である。色調は灰色を呈する。11は擂鉢。口縁部は外方に折り曲げた複合口縁で、外面に2本の凹線を巡らす。内面には粗い卸し目が施されている。内・外面とも赤色の釉が施されていた様である。素地の色調も赤色を呈する。桃山時代（天正～慶長）のもので、備前の流れをくむ。12は大甕で、口径六三・五センチ、高さ六五センチ以上、胴部最大径五八・五センチを測る。口縁部は折り返し of 複合口縁で、ここを除いた全面に茶色の釉が施されている。胴部全体に轆轤目が顕著に残る。素地の色調は明赤色を呈する。

この他に、信楽の甕（江戸初期）、備前の擂鉢（江戸前期）、唐津の碗（一七世紀後半・一九世紀以降）、鉢（一八世紀）、徳利（一八世紀）、産地不明の把手付皿（幕末）などがある。

磁器（第27図13） 第26図3地点出土。青磁の供献具と考えられる。この他に伊万里の碗・皿（一七世紀中頃・一九世紀以後）、水差（明治以降）、京都産の香炉（一七世紀～一八世紀）、産地不明の高坏脚部、小形茶碗、染付の碗（時期不明）・皿（幕末）などがある。

瓦（第27図14・15） ともに第26図5地点出土。14は浅額の宇瓦で、瓦当には唐草文を施す。15は棟込瓦で、単弁八葉の菊花文を内区主文とする。胎土中に雲母片を多く含む。この他の一点も唐草文を施した宇瓦

であるが、機械作りらしく、最近のものであろう。

五輪塔火輪部（第27図16） 第26図4地点出土。下辺は二四センチ四方、上辺は一〇センチ四方、高さ一四センチを測る。上部中央には風輪を固定するため径五・五センチ、深さ一・五センチの円形の窪みが彫られている。文字はなく、石質は花崗岩。

骨片 第26図1地点出土。新しい獣骨と考えられるものと、かなり脆い骨が混じっている。人骨か獣骨かは不明である。（佐藤利秀）

清浄華院内皇族・女院墓地集水榊設置工事箇所 の調査

清浄華院内にある靈元天皇后宮敬法門院藤原宗子墓以下十一墓（第22図）の周囲土堀が、経年により老朽化したので、改修することとなった。併せて集水榊設置工事を実施したのに際して、昭和五十八年十一月十日に立会調査を行なった。調査は掘削を伴う集水榊設置工事箇所の三箇所（各約一メートル四方、深さ約八〇センチ）について行なった（第28図）。表土下には、北側部分でこぶし大の礫層が認められ、他の部分でも同様の礫が混在しているが、基本的には盛土と思われる。工事は、予定通り施工した。（藤井良章）

出土品には、土師器、陶磁器、瓦の破片がある（第29図）。南側の掘削坑からは、二点のみの出土で少ない。総計九四点である。

土師器（1～7） 乳白色系の色調を呈するものが多い。1～5は皿